

里地里山の保全・活用の取組における課題と技術的方策等

分類	(地域レベルでの取組基盤の整備)地域の自発的取組を促す支援体制の強化
手法名	交流事業を軸にした阿蘇波野の体験活動と地域づくり
主体	なみの高原やすらぎ交流館
背景(地域の課題)	畜産等かつて地域の暮らしや生業で活用されることによって維持されてきた阿蘇の草原は、大陸系遺存植物(※)等固有の希少種の宝庫となっている。しかし、産業構造の変化や人口の減少、高齢化の進行に起因して草原の手入れが困難になり、今、全国的にもその維持は厳しい状況となっている。今後は地域内のみにとどまらない保全・再生に向けた取り組みや仕組みが求められる。 ※大陸系遺存植物とは、日本がユーラシア大陸と陸続きであった時代に分布し、日本列島の誕生に伴い取り残されたと考えられている植物。
手法／方策の詳細	阿蘇なみの高原「やすらぎ交流館」は閉校した学校の校舎を改装し、地域住民や外部者の交流拠点として活用されている。交流活動を軸としながら、体験、教育、保全、地域産業の育成といったことまでも視野に入れながら、企業CSRの受け入れ、地元との情報共有や合意形成の調整など幅広い活動に取り組んでいる。  1) 体験プログラムの実施 農業体験、食育体験、林業体験を実施。川遊びやツリークライミング、畜産体験を畜産家など地域の協力を得ながら取り組んでいる。  2) 地域産業の活性化に向けた取り組み 食育を通して波野の特産づくりや仕事づくりに取り組んでいる。一例としてキャベツが有名なことからキャベツ料理のワークショップなどを開催しており、11種類のフルコースを作るなどの成果を上げている。  3) 外部との交流 地域と企業・大学やすらぎ交流館が仲介となつてつなぐことで、交流や産品開発などで地域内だけでは取り組めなかった新たな可能性を模索している。現在阿蘇の農家メンバーと経済同友会の研修や森林組合と中小企業組合が連携した林業研修などを行っている。  4) 地域内外における要望事項の把握と人材育成(図) 地域の要望と、企業等の外部者の要望を把握し、地域活性化と人材育成につながる取り組みを実践するように努めている。
手法・技術的視点	地域の交流施設を、「交流」という機能だけにとどまらず、教育プログラムの開発、地域内ネットワークの構築、地域産業の活性化、人材育成など、多くの分野に視野を広げて活動を展開している。特に活動の主体となる関係者の自立や活性化に焦点を当てた交流方針は、全国の過疎傾向にある里地里山地域の交流の在り方に示唆を与えるものと考えられる。
<p>図 「やすらぎ交流館」の活動概念</p>	
参考資料	里なびin熊本 なみの高原やすらぎ交流館 望月克哉